# 中国哲学研究の再認識

## ——苦境と活路

労　思光
大江平和　訳

### はじめに

私の今日の講演原稿は、中国哲学研究の苦境をテーマにしている。「再認識」という字句を用いたことから、メタ・ランゲージ的思考が頭に浮かぶかもしれないが、実際のところ、今日の短い時間のなかで、従来の中国哲学の研究手法や、そこで用いられている理論的言語の枠組みを論じるつもりはなく、苦境に焦点を絞って講演のテーマにしようと思う。ここでは、二部分に分けて私の論点を提起したい。第一部として、まずこのような苦境についての考察を述べたあと、第二部として、どのようにして苦境を脱却できるか、という問題について、いくつかの考えを提起し、私の提案としたい。

以下、考察に移ることにしよう。

### （Ⅰ）苦境についての考察

もし、伝統的な中国歴史上の中国哲学研究だけについて言えば、理論の発展の変遷において、さまざまな挫折や困難に遭遇してきたが、それが真の苦境となる

ことはなかった。いわゆる「苦境」とは、将来への展望を見失うことにより、自身の努力の方向性が漠然と化してしまう状態をいう。このような状態が中国哲学研究に現れたのは、中国が近代化への圧力を受けるようになってからのことである。

アヘン戦争以降に始まった中国近代化運動の冗長ないきさつをここでは重複しないが、私が言いたいのは、ヨーロッパを源とする近代文化が、次第に世界を変えつつあるとき、中国の知識人は、理念、制度、および生き方などそれぞれの面で、大困惑の状態に陥ったということである。近代化への要請について、五・四運動以降、表面的には、人々は変わらなければならないことを知ってはいたようではあるが、どのようにして変わるのか、どの方向へ向かって変わるのか、という問題については、答えを必要としながらも見いだせないでいた。このような全体的な雰囲気のなかで、中国哲学研究の苦境もまた逐次形成されていったのである。この形成の過程には様々な説があるが、結局、関係してくるのは次の二つの問題であろう。すなわち、「外からの衝撃」(external impact)と「内在的緊張」(internal tension)という問題である。次にこの二つの面から考察を進めていきたい。

## (A)外からの衝撃

外来文化の衝撃を考察する場合、蒙昧な認識という先人の誤りを繰り返さないように、注意を払わなければならない。五・四運動以降、中国の多くの知識人は、自分たちが近代化を推し進めてきたと思い込んでいるが、彼らには、啓蒙運動以降の近代文芸思潮と、十九世紀から現れた近代文芸を批判する思潮とを、区別することはできず、浅はかにも広く説かれていた近代思想を、それと相反する思想学説と同一視して紹介してきた。中国哲学研究者について言えば、これによって、多くの思想上の大混乱がもたらされた。近代文化に直面したあと、中国哲学の伝統に本来そなわっている思惟の方向性と規範は、次第にその効力を失っている(近代社会に通じなくなってきている)ものの、完全に消滅してしまったわけではない(これについては後述する)。こ

れによって、すでに多くの衝突が起こっている。今、近代文化を説く人々もまた同じような状況である。正と反の判断がつかず、互いに相容れない観念を並べ立て、そして、それらを人々に「近代思想」として受容させていったことにより、至るところで、知識人の混乱を増長させてきた。彼らは、近代文化、および近代性のプラスの意味を深く理解することもなく、近代文化のマイナスの欠点を知ることもない。ましてや、そこから導き出される批判思想の理論的な効力の限界については、なおさらのこと知るよしもない。これによって、哲学研究においては、近代世界において果たせる中国哲学の役割を探求することが、ますます難しくなってきているのである。人々は、個人感情や習慣、あるいは環境のニーズに随って選択し、それぞれの好みに応じていくほかなくなってしまった。その結果、中国哲学研究において、新しい伝統主義者、道具主義者、ひいては、宗教化した疑似原理主義派（Quasi-fundamentalists）まで現れた。合理性をそなえた中国哲学研究の道を、真に追い求める者は誰もいなくなってしまった。ポストモダニズムが沸き起こると、それは、中国哲学研究に対して、さらなる虚無化の趨勢をもたらしたが、ここでは詳述しない。

これは、中国哲学研究の苦境の一側面であるが、他方、中国哲学内部から見ると、ほかにも苦境を増幅させる要素がある。これは別の理論的問題が関係してくる。

## （B）内在的緊張——抵抗力と潜在力

ここで、中国哲学内部の「緊張（tension）」について論じたい。それは、中国哲学研究の別の側面に関係するものである。このいわゆる「緊張」とは、互いに匹敵するような二種類の相反する力のことである。近代文化や近代世界の出現という事実に直面したとき、中国哲学内部には、この相反する二種類の力が働いた。これらの力を、私はとりあえず「抵抗力」と「潜在力」と呼んでいる。当然ながら、これらは近代文化との関係についての呼び方である。

中国哲学は長い歴史を有し、それは、中国文化圏に

おいて、社会秩序や生き方に確実に根付いている。ゆえに、近代文化が世界を変えていったとき、中国哲学の影響下にある人々は、この変化を完全に拒絶することはできなかったが、至るところで、ある一定の抵抗力を示した。もし表面的で、浅薄な考察だけに終始すれば、ここに示された近代文化と伝統哲学との間の衝突を、消滅しつつある残存力として、簡単に片づけてしまいかねない。しかし、一歩深く立ち入って考察すれば、このような衝突を与える要素は、なおも強い力をもっていることを発見するであろう。これこそが、私が強調する「伝統的潜在力」である。

「伝統的抵抗力」だけに着目すると、それは、「歴史的惰性」という概念でおおざっぱに説明ができる。伝統哲学が歴史的要請に応えられなかったがゆえに、近代文化と衝突したのだ、とする説は「合理性」(rationality)に欠ける面もあるが、潜在力の存在を考察できれば、そこに衝突の問題とは別の様相(dimention)があることが明らかになる。これは惰性や習慣といった概念では説明できない。

「伝統的潜在力」とは何か。これは、ほとんど論じられたことのない概念であるから、ここで少し離れたところから説明していきたい。

我々が、普段、ある伝統思想や哲学を考察する場合、その特殊性や制約条件に注意を集中させてしまいがちである。これはもちろん間違いだとはいえないが、もし、特定の歴史や社会の筋道から哲学思想を理解し、評価しようとすれば、きわめて重要な部分が抜け落ちてしまう。簡単にいうと、その中の普遍性に関係する部分を見逃してしまう。本来、人間は、思索し、理論構築をするたびに、ある種の普遍性や長期的意義を含む問題に関わっていくものである。そして、それらの問題について出された答えは、まさしくその思想の普遍的要素にほかならない。全く異なる思想や哲学の伝統においても、しばしば普遍性をもつ問題と答えが見受けられることは、一方で互いに異なる哲学思想の間の意思疎通を図る基礎を提供し、他方でそれぞれの伝統内部については、自らの合理性への自覚を喚起するものであろう。前者について、私が、ここ数年強く主

張する「開放的要素」と「閉鎖的要素」との区別は、この問題に関して提起したものである。後者は、今述べようとしている「伝統的潜在力」の源である。人間は普遍的問題を思索し、答えを求めようとすることができることから、伝統哲学の再認識について、ある「合理性」に対する認定が生じる。この認定によって、人々は、その伝統哲学に対して、永遠に希望と自信を持ち続けることができる。伝統哲学自体からいうと、このような普遍的要素の存在には、永遠に発展、あるいは再構築する原動力がそなわっているのである。このような原動力とは、まさしく私が今述べている「潜在力」のことである。

ある伝統哲学、あるいは、それをさらにおし広げた、ある文化的伝統の潜在力は、ひとたび圧力や危機に見舞われたとき、ひときわ顕著に現れる。そして、それはさまざまな合理性を求める努力という形で現れる。しかし、このような努力の内在的基礎は、普遍的要素におかれたものであるから、それは、重厚で、特殊な抵抗力をもつ現象とともに、いかにも逆行するかのように見える。本来、表面的に見れば、外の衝撃を排斥し、拒絶する抵抗力や、伝統回帰を求める潜在力は、一見、その伝統に奉仕しているかのように見えるが、この中には、普遍性と特殊性という対峙があり、保存と創生という差異が存在する。それらが同一の歴史の場面に、同時に現れたとき、不可避的にある「緊張」が形成されるのである。

話を中国哲学研究に戻そう。近代文化は近代社会を出現させ、前近代までに成長した多くの文化に大きな衝撃をもたらした。中国哲学も中国文化の一部として、危機的状態に陥ったことは、当然の成り行きであった。もし我々が、中国哲学の発展の展望について、共通認識をもっていたら、いわゆる「苦境」は存在しなかったであろう。しかし、実際には、このような文化史における大きな変化の中で、展望について、共通認識を求めることは生易しいことではなかった。これは、さまざまな異なる側面の概念の解明、ひいては、新しい理論の枠組みの構築ということにも関係してくる。簡単にいうと、この中の幾重もの問題について、斬新か

つ深い認識をもたなければならない、ということである。この認識ができあがらないうちに、中国哲学研究について、軽率に何かを主張することは、いたずらに論争と衝突を増大させるだけであり、苦境から抜け出すことはできないであろう。それよりも好ましくないことは、投機主義や道具主義的な考えで、中国哲学研究を捉えることである。それは、苦境からの脱却の後押しにならないどころか、中国哲学研究の置かれた状況を、さらに悪化させてしまいかねないであろう。

最後に、共通認識をつくりあげる準備段階として、いくつかの概念を提起し、講演の結びとしたい。

## （Ⅱ）苦境脱却についての考え
## ――いくつかのキーワードとなる概念

先に述べたように、中国哲学研究の本来あるべき道という問題自体には、さまざまな手がかりがあり、共通認識をつくりあげるとなると、それは一朝一夕にできることではなく、ましてや、少人数で慌ただしくできるものではない。ここでは、哲学界の参考までに、いくつかキーワードとなる概念を提起するにとどめたい。ただし、これは要約したものにすぎず、系統的な要請に応じようとしたものではない。

### （A）世界の中の中国

いわゆる「世界の中の中国」（China in the world）とは、自国と世界を対極として見る前近代的概念の言い方である。これに関係するのは、価値の評価ではなく、事実の認識である。近代文化がもたらした近代世界は、基本的には、グローバル化の方向に向かって動いている。これは既存の事実である。ゆえに、利害がどうあれ、我々のあらゆる営みは、この現実に存在する世界の中で行われている。中国哲学研究の苦境は、我々が、中国哲学とは何か、また、中国哲学に何ができるか、という問題について曖昧なところにある。今、この基本的概念を通して考えてみると、中国はもはや世界の中の中国でなければならないということ、これこそが中国哲学がやるべきこと、そしてやれることである。そして、これこそが世界哲学の中でおのずから機能を

発揮させ、世界哲学の一部として存在させ、発展させていくことなのである。「世界と対立する中国」（China against the world）とは、最初に避けて通らなければならない前近代的概念である。

しかし、このように中国哲学の前途を見ていくと、それは間違いなく我々のいわゆる「哲学」に対する理解に影響を及ぼしていく。これは、私が述べる第二の概念と関わってくる。

## （B）「哲学」の開放概念

いわゆる「哲学の開放概念」（Open concept of philosophy）とは、私が何年も前から提起してきたもので、その目的は、異なる伝統哲学の間の橋渡しを可能にする基礎づくりにあった。その具体的な主張は、「再認識思考」によって、「哲学思考」の境界線を引き、題材の次元から完全に開放することであった。例えば、「哲学」を「哲学思考」の成果と見なすことは、全く異なる題材と関係させることができ、また、哲学思考の特性から、哲学の特性を確保することもできる。ここで、私は過去の論点を重ねて取り上げるつもりはない。今、私がこの概念を提起するのは、中国哲学研究がこの概念を受け入れるべきであることを強調するためである。そうでなければ、いわゆる「世界哲学」を、確実に実現させることはできなくなってしまうからである。

先の二つの概念を確立できれば、中国哲学の未来の方向性を決定づける手助けとはなるであろうが、ある疑念が浮かんでくるかもしれない。それはすなわち、ある人々が常に口にする「文化主権」の問題である。この疑念を晴らすためにも、ここで、第三の概念を提起しておきたい。

## （C）開放的要素

「開放的要素」（open elements）とは、「閉鎖的要素」（closed elements）と対極の概念であり、これは、普段使っている用法とは異なる。習慣的に人々がよく言うのは、「開放的システム」と「閉鎖的システム」であるが、私は、それぞれの知識系統には、開放的な面と閉鎖的な面の両面があることを体験から知っている。ゆえに、

二つの概念を提起したい。いわゆる「閉鎖的要素」とは、一つのシステムの中にある、特定の歴史、社会、あるいは、その他の条件によって限定された部分を指している。これは、どのシステムも完全に避けて通ることはできないものである。しかし、人間は、異なる文化的伝統の中で生活していることから、きわめて高い普遍性をそなえた問題をいくつか意識しており、これらの問題に対する探求は、普遍性から方向性を求める要素となっている。この要素を、私はそのシステムの「開放的要素」と呼ぶのである。

いわゆる「文化主権」への疑念は、文化的特性の閉鎖的な側面を過度に強調するあまり、起こったものである。私は、今、次のことを真剣に指摘しておきたい。それはすなわち、我々が、異なる伝統哲学のもとで、思考成果の融合を言う場合、あるいは、中国哲学を世界哲学の一構成部分とする場合、いずれも、開放的要素にのっとって発言しなければならない、ということである。ヨーロッパで興った、いわゆる「西洋哲学」は、開放的要素と閉鎖的要素の両面があり、中国哲学もまた同じである。ゆえに、我々が、中国哲学と世界哲学を結びつけようとするとき、ある特定の文化を放棄し、別の特定の文化を受容するというのではなく、伝統を超え、普遍的意義をそなえた要素の結びつきだけを意図しなければならない。我々がやらなければならないことは、中国文化の開放的要素を抽出し、それを、世界やその他の文化の開放的要素と結びつけることである。焦点を哲学に移すと、我々にできることは、普遍性をもつ思考の成果の結びつきを求めることだけである。受容、あるいは選択したものが、普遍的な要素をもつものである以上、それは、もはや誰が主導権を握るかなどといった問題になることはないはずである。

以上、三点にわたって私見を述べたが、いずれも文化や哲学の前途の鍵となる問題に触れていると思う。ゆえに、私は、これらをキーワードとなる概念と呼ぶ。実際のところ、これらは、中国哲学に対する私の独自の考えではないが、私が確信していることは、中国哲学研究の苦境は、実は、哲学と文化の全体的な危機に

よってもたらされたものであり、苦境から脱却する望みの大半は、我々が、全体的な問題に対して、新しい認識をもち、新しい解決を図れるかどうかにかかっているということである。

（ろう　しこう／台湾・華梵大学教授）
（訳・おおえ　へいわ／東洋哲学研究所委嘱研究員）